

2026 年 7 月 31 日・佐藤塾「源兵衛川・環境デザインの発想とは」ー汚れた源兵衛川の水辺再生への発展的アプローチ

本講演は、静岡県三島市の水辺再生とまちづくりを中心に 34 年以上にわたる、グラウンドワーク三島の活動実績と今後の展望を詳述するものである。

講師は、源兵衛川の水辺再生を始めとする、数々の市民プロジェクトを主導し、国や民間から、現在までに総額 24 億円以上もの独自の資金を調達して、松毛川や境川・清住緑地など 75 件の事業を成功させてきた。

講義では、熊本地震の教訓から得た防災・減災の重要性、英国の NPO や社会的企業の先進事例との比較、そして、三島市が抱える課題（市の主体性の欠如、後継者問題）を指摘。

今後の三島が持続的に発展するためには、市民・行政・企業が連携する「パートナーシップ」の仕組みを強化し、利益を地域に還元する「社会的企業」の育成、隣接の清水町や長泉町まで含めた広域的な「ランドデザイン」の策定が不可欠であると提言する。

最終的に、市民参加による「三島街中改造計画」の立ち上げを呼びかけ、地域の宝を次世代に継承するための具体的な行動を促す内容になっている。

講演のポイント

1. 三島の水辺再生とまちづくりの理念・歴史

- 主権在民と市民主体
 - 「街は市民のもの」であり、主権は市民にあるという立場から、政治家や行政の役割は重要でも根幹は市民にあるとする。
 - 街の美しさや清潔さは住民の美意識の反映であり、ゴミ一つに敏感な「他人事から自分事へ」の意識転換が、街の質と品格を左右すると強調する。
- 現場主義と専門的なアプローチ

- 現場に出て来て、川や畑の荒廃を直接見て清掃・整備を行うことで、生態系の回復や賑わいの創出といった因果を体験的に理解させることが重要。
 - 建築系の大学等と連携し、設計・土木・生態の専門家が「日本最高レベルの設計」を先行して作成。その後、市民と3年程度かけて議論し、愛郷心を計画に反映させる手法を実践。
- 源兵衛川の歴史的変遷
 - 1955年頃の豊かな水環境（白いミシマバイカモの花々が川の中で咲き乱れる風景、群泳するアブラハヤの風景）などを「水の都・三島」の原風景として紹介。
 - 1964年頃から約25年以上もの間、川は汚れ、ゴミが捨てられ、悪臭を放つ、荒廃した水辺環境が続いた。
 - 1988年頃の源兵衛川の暗渠化計画に対して「三島ゆうすい会」を設立し、地下水保護と川の保全運動を展開。
 - 粘り強い、当時の石井市長への説得の末、楽寿園・小浜池での人工的な湛水化事業を変更させ、その予算で、地下水流動に関わる科学的・地質的な調査を実施し、現在の地下水流動資料の基礎を築いた。

2. グラウンドワーク三島の活動と手法

- 英国グラウンドワークの導入とパートナーシップ
 - 単体による市民団体の活動に限界を感じ、英国サッチャー政権下の「グラウンドワーク」を学習。
 - 英国グラウンドワークの専門家を250万円で三島に招聘、「市民・行政・企業の役割分担の明確化」、それらを調整仲介する「コーディネーター組織」の重要性を学ぶ。
 - 「10の提案」のアドバイスを受け、この提案・手法が、現在のグラウンドワーク三島の主要な経営理念になっている。
 - 基本的に「グラウンドワーク」の役割は、市民、企業、行政の中間に立ち、相互の知恵や力を引き出して、一体化させ、新しいパワーを生み出すことにある。

- 具体的な市民活動と成果

- **資金調達と事業規模:** 設立以来の 34 年間で行政や民間資金を 24 億円以上調達、75 件の事業を実施。皇室へのご進講や 34 の賞を受賞するなど、国内外において高い評価を得る。
- **源兵衛川水辺再生:** 街中せせらぎ事業を含め、総額 40 億円を投じて、三島の街中と川を整備した。
- **補給水:** 東レとの交渉で、源兵衛川の冬季期間において安定的な補給水の提供システムを構築。
- **源兵衛川**の中に「仮設道路」として、遊歩道を設置するなど、河川法の制約を乗り越える法律的・技術的な工夫を凝らした。
- **市民参加:** 「水辺ゴミ拾いツアー」の企画や、コンクリート流入による環境被害・事故後の市民ボランティアによる清掃活動など、市民の当事者意識を醸成。34 年間で延べ 45 万人が参加。
- **環境再生:** 三島梅花藻の再生、松毛川のゴミを 3 年かけて 21 トン撤去と 8000 本の潜在植生の植林、境川・清住緑地での湧水地の買い戻しと湧水公園事業の実現など、数々のプロジェクトを市民主体で実現。
- **その他:** 三島測候所の保存運動（2 万 3 千人の署名）、雷井戸の再生・購入、長伏小学校のビオトープ造成なども手がけた。

3. NPO と社会的企業に関する国際比較と提言

- 日本の NPO の現状

- 日本の NPO 法人（活動中約 2.2 万）は、英国（50 万団体）や米国（169 万団体）に比べて極端に少なく「NPO 遅進国」とであると指摘。
- 寄付文化も未熟で、日本の寄付額は 120 カ国中 118 位。個人の寄付が中心の欧米に対し、日本は企業寄付が 7 割を占める。

- 英国の先進事例

- **国家運営の変遷:** サッチャー政権が「パートナーシップ」を提唱し、民活を推進。ブレア政権は「福祉のニューディール」で NPO に大規模に業務委託を進め、予算を「人」に投入する新しい政策の流れを作った。

- **NPO の自立:** 市民が、税の一部を寄付先 NPO に指定できる制度や、ナショナル・トラストのように会費だけで自立していける強力な会員制度が存在する。
- **社会的企業:** 事業利益を社会に還元する「社会的企業」が約 10 万社あり、若者の就職先として人気が高い。企業の定款に社会貢献を明記することが拡大している。
- **三島市への提言**
 - 過去の三島によるインフラ整備は、県の支援が中心であり、市は、街中に特化し、民間企業を支援する政策中心で、市としての独自性や主体性に欠けていたと批判。
 - 今後の発展には、明確な長期的な戦略を踏まえた、三島をさらに確実に発展せられる「グランドデザイン」に基づき、利益を地域社会に還元する「社会的企業」を、市内に多数育成する必要があると提言。

4. 防災・減災と将来構想

- **熊本地震からの教訓と三島への警鐘**
 - 熊本での支援経験から、井戸の破壊、脆弱な避難所、再生可能エネルギーの未導入など、10 年前から想定されていた対策の不履行を厳しく批判。
 - 三島でも、非常用の水源と食料を最低「10 万人分」確保する必要性を提言。商業施設の LP ガスタンクの危険な配置など、危機管理の不備を指摘し、予防原則に基づく事前対策を求めた。
- **現在の環境課題**
 - 源兵衛川のホタルが近年急減しており、原因として餌やりによるカモの大量発生（10 年前の約 20 倍）が、カワニナや幼虫を捕食している可能性を指摘。
- **今後のプロジェクトと広域連携**

- **街中整備計画:**「第 2 の源兵衛川」として御殿川の再生（約 10 億円）、老朽化した源兵衛川の再整備（約 15 億円）、大溝川沿いの整備（約 2 億数千万円）などを計画。
- 2026 年 9 月に、三島市が取得予定の御殿川沿いの土地活用が喫緊の課題。
- **組織の持続可能性:** グラウンドワーク三島による多様な活動が、渡辺氏個人の力に大きく依存している点を課題とし、今後、グラウンドワーク三島を「社会的企業化」し、職員に年収 700 万～1000 万円を払えることができるビジネスモデル（環境調査、コンサル等）を構築していく必要性を提示。
- **ランドデザインの策定:** 三島駅南口・西街区・東街区の駅前再開発開発事業の欠陥・問題点を教訓に、三島市単独ではなく、清水町、長泉町、箱根まで含めた、広域的な「ランドデザイン」の策定を提案。
- 境川から柿田川を結ぶ途中への「水の駅」建設構想や柿田川近くの泉頭城跡地の整備、境川・清住緑地、丸池公園などとの有機的連携による「水の郷回遊路」の設定などを提示。
- **実行委員会の立ち上げ:** 2026 年 9 月以降に「三島街中改造計画実行委員会」を立ち上げ、総額 100 億円規模の計画を策定し、次期市長交代に合わせて提言していく。

まとめ

1. 三島市が目指す町の明確な「ランドデザイン」を、清水町や長泉町を含む、広域的な視点で策定する。
2. 「三島街中改造計画実行委員会」を立ち上げ、御殿川・源兵衛川の再計画を含む、総額 100 億円規模の計画を具体化する。
3. グラウンドワーク三島を「社会的企業化」し、年間 6000 万円を稼げるビジネスモデル（環境調査、コンサル等）を構築して後継者を確保する。
4. 防災計画として、水と食料の最低「10 万人」分確保計画、井戸の保全・再生、避難所の機能強化（耐震、電源、設備）を具体化する。
5. 源兵衛川のホタル減少原因を特定する正式な環境調査を実施し、カモへの餌やり禁止などの対策を講じる。

6. 三島市が取得予定の御殿川沿いの土地活用について、市民の意見を取り入れ、街の目玉となる計画を提言する。
7. 桜川上流域の水草再生プログラムを立案し、生物相の回復を目指す。
8. 耕作放棄地を再生し、菜の花栽培や田んぼ化を進めて、食料生産基盤を強化する。
9. 英国や国内の街づくりの成功事例を学ぶ、月 1 回の「街中再生勉強会」を開催し、先進的な知恵を三島の計画に反映させる。
10. 大場里山地区で発見された「円墳」を歴史遺産として整備し、次世代に継承する計画を進める。
11. 源兵衛川中流部にある埋没した「大井戸」を再生し、周辺をホタルの公園として整備する計画（2027 年 4 月以降）を進める。
12. 外部企業（富士急行など）と連携し、観光客がもたらす、経済効果を、三島市内に取り込む戦略を立てる。